

宮内地区

宮内地区は町東端の山間部に位置します。

宮内地区には甲佐神社が創建され、甲佐明神降臨に関する文化財が点在しています。

また、甲佐神社周辺から緑川の流れるが溪流から川幅が広く緩やかに変化することから、石橋や舟運、近代ではトロッコ林道など様々な交通に関する文化財も認められます。

さらに、緑川の河床では、中生代（今から2億5,000万年前～6,550万年前）の鉱物、ミグマタイトの露頭も確認できます。



1. 広瀬旧道眼鏡橋（所在 広瀬区）

県道三本松甲佐線の甲佐町と美里町の境近くの山側にあります。

天保12年（1841）に日向往還上^{ひゅうがおうかん}に架橋されました。橋の石材は、加工しやすい阿蘇溶結凝灰岩です。

川底の地形から両端の石積みが異なり、道路から見ると、右端の石積みが高くなっています。自動車の普及で新たに道（県道三本松甲佐線）が造られたため、現在は使用されていません。



2. トロッコ林道の鉄橋（所在 広瀬区）

県道三本松甲佐線を美里町方面に進むと緑川に架かる鉄橋が見えてきます。

甲佐営林署から内大臣^{ないだいじん}の角上^{すみあげ}までトロッコ林道が、内大臣を中心とした豊かな森林を活用するため大正3年（1914）から昭和2年（1927）にかけて造成された林道です。大正13年（1924）には、緑川上流域（内大臣一帯）で伐採された木材は、熊本営林局森林鉄道（トロッコ道）から貯木場（現在の甲佐町役場）まで運搬されていました。この鉄橋は、木材を積み出すトロッコ林道の一部でしたが、昭和38年（1963）に内大臣橋の架橋で昭和39年（1964）に廃止となりました。



3. 広瀬阿弥陀堂（所在 広瀬区）

本村集落道路脇の山腹にあります。^{きりつまづくりひらいり}切妻造平入のお堂は、建物全体がセメント造で間口140㍍、奥行120㍍、高さ131㍍です。本尊は総高63㍍、像高45㍍の木造阿弥陀如来立像です。

「だごじゃご（抱かれています子も座る子）も一年間よく頑張った」と堂前で村中がお祝いをする習わしで、例年稲刈りの後に行われていました。

このお堂は、大雨で流されてそのままになっていましたが、約60年前に現在のお堂に建て直されたとのことです。



4. 谷内阿弥陀如来像（所在 谷内区）

坂谷川沿いの谷内公民館内に木造阿弥陀如来立像が祀られています。厨子は木造で朱・青・緑・白・黒で彩色され、幅 104㍺、奥行 57㍺、高さ 160㍺です。仏像は総高 120㍺、像高 65㍺です。

『国郡一統志』には「坂谷 阿弥陀二所 観音 釈迦」と記述があり、現在の広瀬区と谷内区には、阿弥陀仏が二体と観音、釈迦が各一体祀られていたようです。『肥後国誌』には記載がなく、廃寺になったと考えられます。また、谷内公民館横に板碑がありますが、風化して文字が読めません。公民館の川向には破魔呑水源^{はまどん}があり、飲料水として使用されています。



5. 本坂谷天満宮（所在 本坂谷区）

本坂谷公民館の裏にあります。

切妻造瓦葺妻入の本殿は間口 130㍺、奥行 160㍺で、拝殿は公民館を兼ねています。

御神体の菅原道真は、総高 67㍺、像高 55㍺の木造坐像です。脇には二体の随神^{ずいしん}が祀られ、右側は総高 30㍺の木造坐像で、左側は総高 15㍺の木造立像です。

以前は、甲佐岳に登る際にお参りして登っていました。

天満宮の奥の石室には、石造地藏菩薩坐像が祀られています。



6. 金山（所在 本坂谷区）

この鉾山は、広瀬区と甲佐平^{こうさへい}（美里町）との境界の山の斜面にあります。

坑口が三つあり、中央の入口は高さ 1.5㍎、幅 2㍎です。現在は土砂崩れ等により現地へ行くことは困難です。

昭和初期までの近代に銅を中心とした鉾石の試掘、あるいは採掘が行われた鉾山です。地元の人たちはこれを「金山（かなやま）」と呼んできました。

福岡鉾山監督局管内「鉾区一覧」（昭和 15 年 7 月 1 日現在）によると、甲佐町宮内および竜野にて、金・銀・銅が試掘された記載があることから、この「金山」でも金の試掘があった可能性があります。



7. 堂ノ原観音堂（所在 堂ノ原区）

谷内公民館から坂を登ると観音堂が見えてきます。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口・奥行共に 287センチです。中には厨子^{ずし}が二つあり、右の厨子には、舟形光背の総高 32センチ、像高 26センチの木造観音菩薩坐像が、左の厨子には、総高 27センチ、像高 18センチの木造観音菩薩立像が祀られています。

祭日は 11 月 18 日です。お堂は 20 年ほど前に建て替えられました。



8. ミグマタイト（所在 西原区^{にしはら}）

甲佐町広瀬地区緑川左岸（トロッコ林道の鉄橋の約 80メートル上流）で観察できます。ミグマタイトとは変成岩のなかに花崗岩質の物質が入り込んで、不均質な混合物を作っているように見える岩石のことで、ここでは黒っぽい部分に白っぽい部分が入り込んだものや縞状^{しまじょう}になったものが見られます。この辺りには、中生代^{ちゅうせいだい}（恐竜がいた頃）に地下で高温低圧の変成作用を受けてできた変成岩が分布しており「肥後変成帯」と呼ばれています。



肥後変成帯のミグマタイトは、日本列島とアジア大陸との地質学的な関連を考える上で重要であることが評価され、平成 21 年（2009）に「日本の地質百選」に選ばれています。

9. 西原薬師堂（所在 西原区）

県道三本松甲佐線から西原橋を渡り、約 500メートル西にあります。

入母屋造瓦葺妻入のお堂は、間口 410センチ、奥行 510センチです。厨子の中の木造薬師如来立像は総高 60センチ、像高 40センチで、右手は施無畏印を結び、左手は薬壺を持っています。薬師如来像の両脇には、十二神将像が六体ずつ祀られています。十二神将は総高 25 ～ 34センチで髪色は黒で、着物は水色、緑、黒、桃色の四色で再彩色されています。

広瀬区と西原区を結ぶ渡し場の近くに建てられたこのお堂は、川を渡って行き来する旅人の安全を祈願する目的で建立されたと考えられています。



10. 西原の宝塔（所在 西原区）

西原薬師堂から約 50[㍎]北西の土手上にあります。

阿蘇溶結凝灰岩製の宝塔で、相輪^{そうりん}の上部と笠石^{かさいし}の一部は欠損し、塔身^{とうしん}は頸部が下になり、その下部は一部欠損しています。

塔身の四方に「ウーン」・「タラーク」・「キリーク」・「アク」の金剛界四仏^{しゆじ}の種子が刻まれています。このことから、本塔が金剛界大日如来の塔として建立されたことがわかります。

建立された時期は、相輪や塔身の形態から 15 世紀前半とみられます。

平成 28 年（2016）熊本地震で倒壊しましたが、地元の方々によって復旧されています。



11. 西原荒神（所在 西原区）

西原区の集落の西側にあります。

入母屋造瓦葺妻入のお堂は、間口 300[㍎]奥行 370[㍎]です。高さ 70[㍎]の台の上にある厨子の中には、髪は角髪で右手には槍を持っている像高 55[㍎]の男性神像が祀られています。棟板には「天四桂尊」とあり、竣工日（昭和 16 年（1941）4 月 12 日）や大工・棟梁などの氏名が墨書されています。



お堂内の木札から、砥用（美里町）や寒野など様々な地域から参拝者があったことがうかがえます。

12. 小鹿の堤（所在 小鹿区）

小鹿集落から約 170[㍎]東へ下った小川の右岸を約 1[㍎]登ったところにあります。

堤の大きさは高さ 11 間（約 20[㍎]）、長さ 30 間（約 54[㍎]）です。嘉永 3 年（1850）に溜池造築を記念して徳を称えるために建立されたもので、碑文には、水不足に苦しむ小鹿村の人々を救う溜池を造るために庄屋の丸山平左衛門が郡代の村井次郎作と上妻半右衛門と共にこの地を調査し、三年後の嘉永 2 年（1849）3 月に完成。結果、10 町余りの田に水が潤い、干ばつの心配がなくなり、その後、新田が増えたことが刻まれています。石碑の裏側には、溜池の余剰水を放流する余水吐^{よすいばけ}が造られています。

堤までの道は、落石が多く、道がかなり悪いので車で行くことは困難です。



13. 大王神社（所在 小鹿区）

小鹿集会所の横にあります。

切妻造銅板葺平入の本殿は、間口 150㍍、奥行 220㍍です。奥から高さ 95㍍、幅 100㍍の祭壇の上に厨子があります。中には二体の木造坐像が祀られており、右側は像高 40㍍の男神、左側は像高 33㍍の女神です。拝殿は入母屋造瓦葺です。

『肥後国誌』には「大王社」と記され、明治時代に入江天神と合祀されて天満宮とも呼ばれるようになりました。

祭日は9月15日です。



14. 井戸江の^{さるたひこおおかみ}猿田彦大神（所在 井戸江区）

柳瀬地区の道路左脇にあります。

明治18年（1885）の建立で、高さ110㍍、最大幅70㍍、最大厚20㍍、台座は130㍍です。祭日は11月15日です。

猿田彦は『古事記』および『日本書紀』の天孫^{あまてらすおおかみ}降臨に登場する天照大御神に遣わされた^{くにのみこと}邇邇芸命を道案内した国津神とされ、天と地の境に出現しているので、境の神としても信仰されました。江戸時代には導きの神として崇拝され、全国的に猿田彦の信仰が広まりました。町内の猿田彦大神は19世紀に建てられています。



15. 井戸江地藏堂（所在 井戸江区）

井戸江峡交流拠点施設の脇の道を上ると竹林の前に地藏堂があります。

三段の石組の上に石室があり、全体の高さは150㍍、幅96㍍です。このうち石室は高さ120㍍、屋根幅120㍍です。石室の中には像高65㍍、幅34㍍の石造地藏菩薩立像が祀られており、ともに阿蘇溶結凝灰岩製です。光背に向かって右に「安永六天 井戸左衛門」、左に「五月 喜右衛門」と刻まれており、安永6年（1777）5月に建立されたことがわかります。石室は昭和年間の建立です。



16. 安平阿弥陀堂（所在 安平区）

安平集会所の横にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口216センチ、奥行254センチです。厨子の中には三体の阿弥陀三尊像が祀られています。中央には総高80センチ、像高50センチの木造阿弥陀如来立像、右側の脇侍は総高55センチ、像高35センチ、左側の脇侍は総高55センチ、像高37センチの木造立像です。三体とも顔の部分は金色に彩色されています。

集会所の正面左側には、御門大明神^{みかどだいみょうじん}の石碑もあります。



17. 甲佐大明神降坐之碑（所在 安平区）

安平集会所から約60メートル北の畑の隅にあります。

文政2年（1819）建立で、石垣積の台座は高さ175センチ、幅217センチ、奥行211センチで、その上に高さ210センチの石碑が建てられています。

この石碑には、「阿蘇大明神である健磐龍命^{たけいわたつのみこと}が、第二子の甲佐神を南方の守護神とするために、鎬矢^{かぶら}を放ち矢が落ちた所に社をつくることにした。

阿蘇山から甲佐神が降臨された所が安平で、その途中の御宿をとって休まれた所に「石の間臥」（マドロミの石）といわれている高さ2メートルの巨石がある。この巨石が磐座^{いわざ}で甲佐神の後霊として祠（小さな社）を建てている。」と記されています。

祭日は1月9日です。



18. 石の間臥(旧:石ノ間伏) (所在 安平区)

上揚区から御船町の水越^{みずこし}へ行く林道山上幹線^{さんじょうかんせん}の途中にあるヒノキ林に中にある自然石です。道から3メートル下にある岩は高さ2メートル、幅1.6メートル、周囲7メートルです。

言い伝えでは、阿蘇大明神である健磐龍命は第二子の甲佐神を南方の守護神とするために鎬矢を放ち矢が落ちた所に社をつくるよう命じます。

十三人の供を連れて甲佐神が阿蘇からやってきますと、山の頂上に大きな岩があり、一行がこの地に着いた時に疲れて寄りかかって眠ってしまったとのこと。そこでこの岩を「石の間臥」（別名「マドロミの石」）と呼ぶことになったそうです。



19. 御手洗橋みたらいばし（所在 安平区）

御手洗神社の約 50^{メートル}東側の安平川に架かる石橋です。

上揚区や安平区と小鹿区を結ぶ重要な路線上に嘉永 5 年（1852）に架橋され、矢部（山都町）地方と結んでいました。

立地が火砕流台地の地形であるため、川底からの基礎部分とアーチの上の壁石部分を阿蘇溶結凝灰岩の切石で高く積み上げているのが特徴です。現在は壁石部分が嵩上げされ、路面幅も拡幅されています。



20. 御手洗神社（所在 安平区）

甲佐神社脇から安平区へ約 1^{キロ}の道沿いにあります。

切妻造瓦葺平入の本殿は、間口 260^{センチ}、奥行 205^{センチ}です。厨子には甲佐神社の守護札が六枚祀っています。以前は、男神と女神の二体の御神体がありましたが、盗難にあったとのこと。言い伝えでは、甲佐明神が近くの安平川で手を洗われたとされています。

敷地内の隅には、安平の猿田彦大神が建てられており、神社入口には、幹周りが約 4^{メートル}の御神木があります。付近からは布目瓦ぬのめがわらが採取されています。

『国郡一統志』には「御手洗社」、『肥後国誌』では「御手洗大明神社」と記されています。



21. 安平の猿田彦大神（所在 安平区）

御手洗神社の境内にあります。

天保 13 年（1842）の建立で、高さ 145^{センチ}、最大幅 35^{センチ}、最大厚 15^{センチ}、台座は 50^{センチ}です。

『新甲佐町史』によると、「当初から御手洗神社の境内に祀られていた。」とあります。

祭日は 12 月 15 日です。



22. 甲佐神社（所在 かみあげ 上揚区）

甲佐町やな場から1.5^{km}西の県道三本松甲佐線沿いにあります。

主祭神は健磐龍命（阿蘇大明神）の御子、八井耳玉命（甲佐明神）で、健磐龍命、蒲池比咩命、神倭磐余彦命、媛蹈鞬五十鈴媛命を配祀しています。なお、八井耳玉命（甲佐明神）は、阿蘇神社の主祭神健磐龍命の子で速瓶玉命の異母弟であると神系図では位置づけられています。

元は鎭崎宮と称したが、「三韓」出兵の時、天から金の甲を授けられ、神功皇后を助けたので、神功皇后凱旋ののち勅号により甲佐宮と改めたとされています（正平16年（1361）8月付「甲佐社牒写」（『大日本古文書 阿蘇文書之二』阿蘇文書写二十九））。

甲佐神社が古文書で最古に確認できるのは平安時代の保延3年（1137）で、健軍社（熊本市）・郡浦社（宇城市）と共に阿蘇社の末社と位置付けられています（康治2年（1143）2月付「阿蘇大宮司宇治惟宣解」『大日本古文書 阿蘇文書之一』2号）。

また、12世紀後半～14世紀中頃には「当国第二宮靈験殊勝社壇也」（承安3年（1173）1月18日付「木原顕実寄進状」（『大日本古文書 阿蘇文書之一』3号）や「我神者忝阿蘇大明神御嫡子、南郡管領之鎮守也」（正平16年（1361）8月付「甲佐社牒写」（『大日本古文書 阿蘇文書之二』阿蘇文書写二十九））等の記載がみられるように、益城郡（緑川流域）の信仰を一身に集める鎮守である、と主張するようになります。

『新甲佐町史』によると、建長2年（1250）の甲佐社領は八代海沿いの港津とそれらと甲佐社をつなぐ交通路上の要衝などを含めて307町1反4丈の広大なものでした。

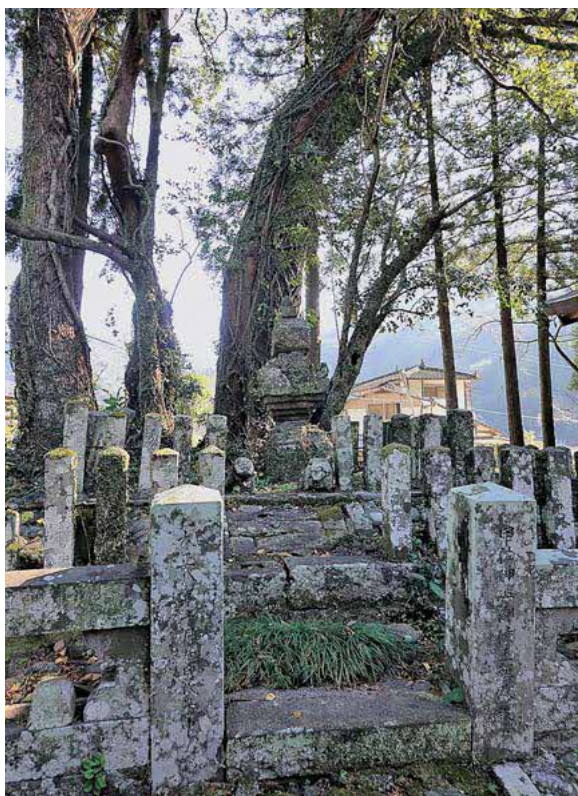
こうしたことから、甲佐社は益城郡の鎮守として崇敬を集める存在であり、13世紀末の鎌倉時代には肥後国の御家人竹崎季長が甲佐社に蒙古襲来絵詞（令和3年国宝に指定）を奉納したことにもつながっています。

明治6年（1873）に郷社に列格しました。

明治27年（1894）には拝殿が焼失し、同31年（1898）に現拝殿が再建されています。

境内には二宮（阿蘇十二宮）、三宮（八鉾大神）、四宮（雨ノ宮）の三社と御陵があります。御陵には文明11年（1479）に阿蘇大宮司氏の有力一族であった村山刑部大輔宇治宿祢惟廣によって建立された宝篋印塔であることが『肥後国誌』や『索隠甲廟記』の記述から確認できます。この御陵は地元では「みささぎさん」と呼ばれています。

境内には水盤（文政10年（1827））や龍神を象った灯籠（文政9年（1826））、力士を象った灯籠（文政12年（1829））、布哇国出稼人によって奉納された灯籠（明治33年（1900））があり、拝殿には蒙古襲来絵詞大絵馬（平成18年（2006））などが奉納・寄進されています。



御陵



左上：龍神灯籠 右上：力士灯籠
下：布哇国灯籠



甲佐神社

23. 上揚弁財天（所在 上揚区）

甲佐神社の向かい側緑川右岸堤防下の水^{みずはね}の根元にあります。

石室は間口 64^{センチ}、奥行 50^{センチ}、高さ 99^{センチ}で、中には舟に乗り琵琶を持った弁財天が祀られています。弁財天は木造坐像で、八本の腕には剣、槍、弓等の武器や宝物を持っています。

弁財天は水難事故を防いでくれると言います。大正 5 年（1916）に再築されていますが、その後、御神体が盗難の被害に遭い、住民によって新たな木製の弁財天が祀られています。

祭日は 8 月 15 日です。なお、平時は施錠されており中の弁財天を見ることはできません。



24. 上揚の板碑（所在 上揚区）

甲佐神社から 500^{メートル}上流の県道三本松甲佐線沿いの個人宅にあります。

安山岩製の高さ 115^{センチ}、最大幅 50^{センチ}、最大厚 24^{センチ}で、板碑の上部に月輪を刻み、その中に阿弥陀如来の種子「キリーク」を刻んでいます。中央より下部に十六行の縦線と三段の横線が引かれ、平均横 2.5^{センチ}、縦 10^{センチ}の四五個のマス目^{がちりん}が作られています。本来はこのマス目中に講衆の戒名^{こうしゅ かいみょう}が刻まれますが、本板碑には記名はみられず、墨書の可能性もありますが、その痕跡はみられません。

本板碑は講衆により建立されたもので、16 世紀半ばのものと考えられます。



25. 上揚仁王堂（所在 上揚区）

上揚区の北側の山裾にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口・奥行ともに 400^{センチ}、向拝は半間（90^{センチ}）です。中には、三体の仏像が祀られています。正面の仏像は総高 180^{センチ}、像高 135^{センチ}の火焰光背^{かえんこうはい}を負い、右手に 60^{センチ}の剣を握った木造不動明王立像です。右の薬師如来像は像高 70^{センチ}で、左の仏像は総高 85^{センチ}、像高 55^{センチ}で木製坐像です。その他に炭化した仏像が二体、左隅と不動明王像の右横にあります。建物の右手には石造りの手水^{ちようず}があります。

新甲佐町史によると「明治元年（1868）から始まった神仏分離令により、甲佐神社の境内にあった神宮寺^{じんぐうじ}は廃寺になり、不動堂は境内の外に移された」とあります。

仁王堂の不動明王像は、不動堂にあったと推測されます。



26. 日枝神社（山の神）（所在 上揚区）

上揚区の北側の山裾に仁王堂と並んで建っています。

切妻造瓦葺平入の本殿は、隣の上揚仁王堂と同じ造りです。厨子には、扉が三つあり、それぞれの扉の中には二体ずつ（右が男神、左が女神）計六体の木造男女神像が祀られています。

比叡山の麓に鎮座する日吉大社は、日吉・日枝・山王神社の総本宮です。日枝神社は日吉神社で、甲佐神社の神宮寺の妙智院の護法神であったと考えられます。

祭日は12月初申です。



みょうちいん

27. 上揚の猿田彦大神（所在 上揚区）

日枝神社入口左の個人宅にあります。

高さ 97センチ、最大幅 37センチ、最大厚 10センチ、台座は二段で上段 23センチ、下段 7センチで、背面に「明治十二年（1879）四月吉日」と刻まれています。



28. 上揚観音堂（旧：上揚阿弥陀堂）（所在 上揚区）

日枝神社・仁王堂より約 50メートル南の集落の中に建っています。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口 200センチ、奥行 180センチです。中の厨子は幅 40センチ、高さ 58センチで、その中には総高 55センチ、像高 45センチの木造観音菩薩坐像が祀られています。この観音菩薩像の由緒等は不明です。

明治元年（1868）神仏分離令により、上揚仁王堂の不動明王像と同様に神宮寺から移されたものである可能性があります。お堂の外には、石造の手水（文化（1804～1818）の文字が刻まれています）もあります。



29. 神宮寺住職の板碑（所在 上揚区）

上揚の豪淳の碑の近くに、年代の異なる板碑が三基あります。これは甲佐神社境内にあった神宮寺の住職の墓碑または供養塔です。

建立年は東から享保11年（1726）、文政13年（1830）、宝永6年（1709）です。高さは東から45センチ、100センチ、125センチです。板碑には「大阿闍梨」「権律師」「法印権大僧都」などの僧侶の地位を示す文字が刻まれています。

『肥後国誌』には「神宮寺例光山妙智院 台宗叡山正覚院末寺」と記載されており、妙智院には本堂・冠木門・萱葺きの庫裏などがあり、甲佐宮の鳥居の右手に建つ神宮寺でした。この神宮寺は、明治元年（1868）の神仏分離令により廃寺となっています。



